

第12回館長講座

2017年10月21日

今回は、故藤本強 福島県文化財センター白河館(愛称まほろん)館長の、まほろんでの館長講座で使用されたスライドを中心に、この館長講座を元に作成された『イタリの世界文化遺産を歩く』(2013、同成社刊)での国立西洋美術館研究員の飯塚隆さんの解説に依拠して進めていく。

藤本さんは2010年9月、次の館長講座の資料集めのためにかけたドイツのローテンブルグで急逝された。藤本さんの撮影資料を使わせてもらうのは、この写真を撮ったときに私も東京工業大学の亀井宏行先生と一緒にパエストゥムに行っていて一緒に写真も撮っていたから。

パエストゥムは前600年頃、チレント地方の北端の沿岸にシュバリス人が植民した町で、現在の遺跡の名称パエストゥムは、前3世紀前半にローマの植民都市になったあとの名前。

アテナ(ケレス)神殿、ポセイドン神殿、ヘラ神殿(バジリカ)の保存の良い三つの神殿をはじめとしてギリシャ時代に遺された多くの建物と建物址がある都市遺跡である。ローマ時代にも都市としてあった。この時期の遺構も残存し、都市を囲む城壁も良い保存状態にある。

パエストゥム駅・シレーナ門

東のシレーナ門は鉄道の無人駅パエストゥムを出てすぐのところにある。シレーナ門はヴォールトで覆われ、外側の要石にスフィンクスが彫られています。最初セイレン(シレーナ)と解釈されたため、シレーナ門と名付けられた。

左側が亀井さん、右側を歩いているのが私。

バス駐車場・遺跡東側の道・遺跡入口前

シレーナ門をくぐってまっすぐ西に進むと遺跡を貫く道に突き当たり、そこを右へ折れると遺跡の入口。インフォメーションのマークのある側が遺跡の入口で、土産物屋が並ぶ観光地でもある。

遺跡の地図など

パエストゥムの3神殿は北端の「ケレス神殿」も含めて、雄渾なドーリス式の列柱を備えている。「ケレス神殿」と「ポセイドン神殿」の間には中央広場(フォルム)があり、その周辺に体育場などの公的施設やラテン語の碑文を刻んだ個人の記念碑が幾つものこっている。

アテナ神殿

神殿はドーリス式で、円柱の上に載るお皿のような石と四角い扁平の石が特徴。柱は前に 6 本、側面に 13 本ならび、ギリシャ神殿の典型的な比率になっている。建設年代は前 500 年頃、遺跡にある 3 つの神殿の中では 2 番目の建設。出土した奉納品からギリシャの女神アテナに捧げられたことがわかった。

アゴラ

ギリシャ時代の中央広場でアテナ神殿の南側にある。現在発掘されているのは、アゴラの西半分。アゴラの南端にフォロ（ローマ時代の中央広場）が設けられた。

アゴラに、地面を直に覆っている切り妻屋根がある。この屋根の下には四角い穴が掘られていて、穴の断面は石積みの壁で固められており、屋根はもともと盛り土で覆われていた。この遺構から出土した黒像式の陶器から前 6 世紀末に建設されたことがわかった。

プールのある神域

切石で囲まれた長方形の大きな窪地で、名前の通り 50 メートルプールに形も大きさも似ている。この遺構は、フォルトゥーナ・ウィリリスの神域であると考えられている。神域が建設されたのは町がローマ化された後。

フォロ

発掘された広場の大きさは 57×150 メートルで、東側部分は未発掘。前 3 世紀にフォロが整備されたとき、アウグストゥス時代に、広場は見事な列柱廊で取り囲まれていて、その名残が、現在、広場の長方形の輪郭に沿って置かれている数々の円柱のドラム。

平和神殿周辺

前 100 年頃に建設された。神殿が、南北方向に建てられているのも特徴。現在、基壇以外はほとんど失われているが、前面と側面にコリントス式の柱が立ち、その上にドーリス式のフリーズが載っていた。フリーズを飾っていたメトープの浮彫は、博物館におかれている。

円形闘技場(ローマ時代)

円形闘技場の大きな石灰岩の石積みの壁は前 1 世紀の創建時のもので、壁の外側に並ぶ煉瓦の角柱は後 1 世紀の拡張工事で建てられた。闘技場は西半分だけが発掘されている。

集会場

集会場の遺構は岩場を円形の階段状に彫り込んだもので、市民権を持つ人々が集まりました。似た構造の集会場は、シチリアのアグリジェントにもある。建設されたのは前 5 世紀の前半で、しばらくの間、集会場としての機能を果たしていたが、ローマ時代になると

集会場は埋められてその上に新たな神域が設けられた。現在、階段席の上に残る石の構造物は、ローマ時代の神域の遺構。

居住区

居住区の南北の幅は 300 メートルで、区画を仕切る 2 本の東西の大通りの間隔に相当しています。そして、東西の通りに直交する南北の道が 35 メートル間隔で走り、300x35 メートルの区画が連なる大規模な居住区域が構成されている。この町の整然とした区画は、前 6 世紀のギリシャ人の時代までさかのぼる。

聖道

南端の城壁に向かってまっすぐに延びる道は「聖道」の名で知られているが、正式な名称ではない。

ポセイドン神殿

3 つの神殿の中で最大のポセイドン神殿。この通称は、ギリシャの町ポセイドニアの名祖である海神ポセイドンに因んでいる。この神殿は保存状態が大変に良好で、ドーリス式ギリシャ神殿の古の姿を今日に伝える、きわめて貴重な神殿。

前 5 世紀の第 2 四半期に建設され、6x14 本の周柱式で、柱には 24 本の縦溝が彫られている。エンタシスが控えめですんぐりした柱と、その上に分厚いアーキトレーブ（梁）が載る。正面から神殿を眺めると、興味深い特徴がある。柱を支える床面は完全に水平ではなく、中央の部分がわずかに高くなるように湾曲しているが、水平線が人間の目にはくぼんで見えるため、それを補正するためのギリシャ人建築家の工夫。

バジリカ(ヘラ神殿)

3 つのドーリス式の神殿の中で最も古いのが、前 540～530 年頃建設されたこの「バジリカ」と呼ばれる神殿。「バジリカ」は通称で、ヘラに捧げられた神殿。前面に 9 本、側面に 18 本の柱が立っている。円柱はエンタシスがかなり強調され、中央から上部にかけて急に先細りしている。柱に戴かれたフリーズはほとんどが失われたが、屋根を飾っていた彩色テラコッタは一部現存。

博物館

遺跡の前に建てられた博物館。発掘された先史時代からの発掘物が収められている。ヘラの神域のほか、町の墓地の出土品が博物館のコレクションに加わっている。

Tomb of the Diver

中でも有名なものが、古代ギリシャ時代のフレスコ画。

「飛び込む男の墓」の石棺に描かれていた絵画で、ふたの裏には高い台から男が水の中に飛び込んでいる場面が表されている。墓の名の由来となったこの飛び込む男の情景は、生から死への旅立ちを暗示しているのだろうか。前 470 年頃制作された。

飲めや、愛せや、というところだろうか。右の 2 人が恋をし、3 人がコタボスに興じている。コタボスはそのままと訳するとワインの澱を的に向かって投げる、ということのようだが、この絵では台付の皿に何かをのせてのせたモノを的に当てるようなもの。右から 3 番目の人物は、彼の心はゲームからははずれ、彼は最初の人物とエフェベ(未成年のギリシヤの若者)の間のエロチックなアプローチを見て、欲望と皮肉と一緒に興味を示している。

長い方の壁の壁画で、葬儀場を代表する別の場面があり、歌手、フルート奏者、歌手がいる。

棺の短い方の両壁では、右側はテーブルに置かれた花瓶からワインを注ぐ裸のエフェーベが見える。左側、男が、マントを着てスティックをついていて、フルートを演奏する女の子（これらのフレスコ画の女性の唯一の人物）についていくダンスをするエフェーベ。

ほかの墓の壁画の展示

そのほかの遺物の展示の様子